



ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成16年4月15日
通巻37号

第8回日本下水文化研究会総会のお知らせ

NPO 法人日本下水文化研究会も法人認証を受けて5年が経過いたしました。昨年度は、第7回の下水文化研究発表会を開催し、海外からの講演者、発表者をお呼びするとともに、海外技術協力の実践へ向けてのスタートを切った年となりました。

その他の活動も本部が実施する定常的な事業のほか、「し尿分科会」では活動成果を一冊の本に取りまとめました。また、関西支部が改組され、木村支部長を中心に研究会、見学会など多様な活動が展開されました。

こうした動きに見られますように、会員の関心、テーマは多様に広がっておりますし、首都圏以外の会員へのサービスを考えますと、分科会活動、支部活動の充実が求められてくることと思います。分科会、支部活動とも独自の財源を含めた自主的運営が求められます。そうした意味から、海外技術協力につきましてもひとつの分科会活動として展開していくことで考えていくつもりです。

一方、運営委員会といたしましては、財政的逼迫に直面するなかで、活動助成金の取得とともに経費削減に努めてまいりました。その結果初期の事業目的を達成するなかで予定より多くの繰越金を得ることができました。これも会

員各位のご協力の賜と感謝しております。

本会の将来の活動のあり方につきましては、評議員の方々のご指導もいただき何度か議論の場を設けました。NPOとして、活動の成果を社会へ示していくことも含めてこれからの活動を考えていかなければならないだろうと考えています。

つきましては、平成16年度の活動についてご審議いただくため、第8回総会を下記の通り開催致しますので、何卒御出席いただきますよう御案内申し上げます。

記

日 時：平成15年5月22日(土)午後1時30分
(午後1時受付開始)

場 所：日本水道協会7階会議室

今回の総会終了後、昨年開催された第3回世界水フォーラムで事務局長を務められた尾田栄章氏から記念講演をいただきます。多様なテーマを取り扱った世界水フォーラムでの議論のなかから、本会の活動とも関係するお話がうかがえるものと期待しております。こちらの方は会員外の方も参加できますので、ふるってご参加いただければ幸いです。

“水と火と味の祭典 多摩源流祭り”へのお誘い

今年も5月4日の“源流祭”の日が近付いて参りました。多摩川最上流部小菅村V字谷に渡された鯉のぼり。漆黒

の間に打ち上げられる仕掛け花火と日本一のお松炊き。忘我の境地とはこの瞬間を言うのでしょうか。

このドラマを、源流ならではの清水で醸造された地酒と地魚(岩魚、山女魚など)と山菜を肴に心ゆくまで堪能していただきながら、多摩川の源流の方々と年一回心の交流をしようというのが、多摩源流祭りの発端と伺っております。

そして翌日は、有



小菅川・雄滝

志による水干(多摩川源流泉)までのハイキングを予定しています。老いも若きも、男も女も気持ちの良い汗を流しに来てください。今年新装なった「小菅の湯」には9つのお湯があります。大自然のなかでゆっくり温泉気分が味わえます。(源流祭りのイベントを8面で紹介します。)

記

日時：平成16年5月4日(火)～5日(水) 1泊2日
集合：5月4日 AM 11時

JR八王子駅北口タクシー乗り場

行程：

(1日目) 八王子～中央高速上野原IC～峠～小菅村～荷物を置いて滝めぐり(白糸滝、雄滝)～入浴・夕飯～お松炊き・花火大会～交流会(宿)

(2日目) 宿出発8:30～三ノ瀬～笠取山(水干)～宿～小菅の湯～八王子駅(解散)18:00予定

宿：山水(やまみず)館3食付(0428-87-0533)

費用：

宿泊費3食付 大人7,000円、小人4,000円

交通費往復 大人5,000円、小学生以下2,000円

交流会費 大人のみ2,000円

お問合せは藤森正法さんまで(090-4132-5501、お申込みは4月24日まで、FAX 03-3801-4848)

「アフリカのトイレを考える会」に参加して

本会関西支部 中越 哲男

『麦の家』訪問

ワークショップの当日、2004年3月18日は、前日より10度も低く、最高気温が10未満で雨も降り風もあって寒かった。JR湖西線比叡坂本駅に男女20人程が集まり、駅から3km程度の距離を山の中の狭い道を上って『麦の家』（大津市坂本1-3-50）に到着した。『麦の家』訪問は「日本農村の伝統的トイレと農的暮らし」が目的である。ここは、山崎隆さんの理念を実践するためのもので「生産の場で暮らし」、「学び合いの家」として茶を飲みながら語り合い、研鑽の場として活用するための家である。

山崎さんから「農を基本とした自律が大切である。自立するためには自律することです。この肥沃な田畑も入植当時は砂地で痩せていました。ここに生ゴミ（ゴミと言ってもゴミではない、資源である。）に鶏糞を混ぜて堆肥を作り、炭を焼いたときにできる木酢液は農薬代わりに使い、木や炭を燃やした後の灰はカリウム肥料として、また、人の排泄物も宝として大地を潤してくれます。現在では、農家も排泄物を使わなくなりました。有機質肥料を使わず化学肥料を使っていると土壌は痩せて固くなり、作物は病虫害に弱くなり農薬に頼らなくては商品として収穫できないようになる。そして、農薬を散布した危険なものを食べる事になる。」との話と聞いた。



『麦の家』で「日本農村の伝統的トイレと農的暮らし」を見学

「チュンベ村エコトイレ導入に向けて」ワークショップ

その後琵琶湖博物館に行き、昼食の後「水と水文化研究会」主催のワークショップ「チュンベ村エコトイレ導入に向けて」が行われた。

嘉田会長の経過説明

タンザニアで1991年から、マラウイで1995年から水、と健康問題について調査した結果、原因はトイレ問題に行き着く。（詳しくはふくりゅう36号嘉田由紀子「アフリカの村落で使える「エコトイレ」づくりへのアドバイスを求めて」を参照してください。）

「ベトナムのエコトイレの導入から学ぶ実践的課題」

原田英典さん（京都大学大学院修士課程）

ベトナム少数民族で最貧に近い部族、Koho族にトイレを普及させて衛生の向上と肥料の効果を認識させる試みを行った。肥料としての扱い易さから尿尿分離方式のトイレを作った。トイレは6ヶ月貯留できるものを2基作り半年毎、交互に使用できるようにした。

このようなトイレを造った当初はトイレに跨って実演もした。その後普及には地域のケースワーカーの働きが一番大きく、1年間ケースワーカーが巡回してトイレが適正に使用されているか、灰も全体を覆い尽くしているか、水で流しきれいにしているか、など細かく指導して回った事が功を奏した。その結果9割が適切に使用された。

ベトナムは中国文化の影響か、尿尿利用の習慣があったので作物に使用することには大きな抵抗はなく取り入れられ成功と考えられる。

（原田さんの報告は「ベトナムダンフォン村におけるし尿分離トイレの導入」として、第7回下水文化研究発表会講演集、pp.65-70に掲載）

「チュンベ村現況報告」 田中亜以子さん他

マラウイはアフリカの南東部で漁業、観光、農業を主な産業として生活している。湖は汚染して、ビルハルツアと言う尿を介した住血吸虫病の蔓延によって乳幼児死亡率が高くなっている。

この集落の20軒中40%はトイレが無いと言われるが、実際はもっと多く70%はトイレが無い状態である。トイレがあることはステータスシンボルであるが、トイレを造りたくない背景がある。

フォーラムの意見集約

家畜の糞は肥料価値を認めても、人の排泄物は人の意識改革をしない限り利用が難しい。そのためには安全なトイレを造り、安全で使いやすい尿尿の肥料化で、啓蒙用の実験農場を造ることが必要と考えられる。

以上のように今回のワークショップは日本では忘れられようとしている尿尿の問題を原点に戻って考えさせられた意義ある会議であった。

動き始めた『東本願寺と環境を考える市民プロジェクト』

関西支部長 木村 淳弘

すでに何回かふくりゅうで取り上げてきましたが、東本願寺では親鸞聖人七百五十回御遠忌に行われる両堂等修復事業を機会に、環境問題に率先して取り組む姿勢を表明しています。その一環として東本願寺が持つ場としての機能を活用し、市民(特に地域住民)が自分たちの生活と環境を考えるきっかけをつくるための活動を始めています。

活動を進めていくために、京都市内の市民団体が東本願寺とともに「東本願寺と環境を考える市民プロジェクト」を立ち上げました。日本下水文化研究会もこの活動に参加してきました。

昨年11月21日に開催したシンポジウム「東本願寺が市民とともにできること」での議論や提案を踏まえ、今年1月26日には東本願寺と環境を考える市民プロジェクトの第1回の会議を開き、その後ほぼ1月に1回のペースで会議が開かれ、今年度に市民プロジェクトが取り組んでいく事業計画について話し合いが行われています。

本年度は1年間絶え間なくイベントを実施して、市民(特に地域住民)が自分たちの生活と環境を考えるきっかけをつくることを目指し、また、東本願寺にとって、市民プロジェクトで効果的な働きかけのモデル作りをおこなうことが、市民参加・協働の考え方を内部に浸透させていくきっかけになるとして、以下の1年間の「具体プロジェクト案」を決めました。

各プロジェクトについては、ここにワーキンググループを作り詳細に詰めていくことにしています。

このように東本願寺という、京都の有名なお寺を利用し、環境問題を市民と一緒に考える場を作ることは非常に有意義であり、一般市民の方も参加しやすいのではないかと思います。

これらの催しの内、お堀の掃除は市民と環境、水問題を考えるよい機会になるとも考えています。しかし、事故の心配、浚渫した泥の始末など解決しなければならない問題も少なくありません。会議では、本格的な土木工事をやる

- 年間プロジェクト案 -

プロジェクト名	日時
雨水タンクの設置・活用プロジェクト	3月27日
本願寺水道を歩こうプロジェクト	4月24日
ふるしきワークショップ	5月中
生き物観察会in枳殻邸	6月19日
お堀の清掃	7月31日
数珠作りワークショップ	10月中
活動報告・交流会	12月はじめ



京都・東本願寺のお堀

わけには行かないから、子供たちを集めて「お堀で遊ぼう」といった趣旨でも良いのではないかという意見もありました。

このプロジェクトは日本下水文化研究会が担当することとなっています。会員の皆様の協力がなければできません。プロジェクトの企画に協力・参加してくださる会員を募集します。奮って多数参加してください。企画準備段階から参加して頂きたく思っています。参加を希望される方、アイデアをお持ちの方は、木村淳弘までお知らせください。

E-mail k-atsumi@kcn.ne.jp

なお、年間プロジェクト案の最初のイベントはすでに行われました。それに先立って2月11日には、雨水タンクの設置準備会と雨水浸透試験を行いました。本会関西支部もこれに協力しました。3月27日には、京都雨水利用を進める市民の会から寄贈された雨水貯留タンクの設置・採納式は、地元京都では大きな反響を呼び、KBS放送、京都、朝日、毎日、読売新聞に取り上げられました。東本願寺の安原参務の「小さなタンクだが、自然を守る大きな事業の一步にして行きたい。」というコメントなどが掲載されました。市民プロジェクトとしてもいよいよ最初の一步が踏み出せたようです。雨水貯留タンクは、御遠忌本部の屋根の上に設置され、次のメッセージが記されています。

雨に親しもう 雨水タンク『雨水くん』
「古来私たちは雨を生活の中で活用し、雨の恵みを身近に感じていました。果たして今はどうでしょう。この小さな雨水タンクで雨に親しむことをきっかけに、忘れかけている雨のはたらきを思い返し、今の私たちの暮らしや自然との付き合い方を考えていきたいと願います。」
(酒井記)

「本願寺水道を歩こう会」(4/24)については6面を参照ください。

ニューデリー・スラブ・トイレ博物館再訪

家庭紙史研究家 関野 勉 (本会会員)

インダス文明の遺跡の一つであるドーラーピーラー遺跡の訪問を計画してから4年目にして今年漸く実現しました。その途中で2月20日にインド、ニューデリーにあるNGOの経営するスラブ・トイレ博物館を再訪する事ができました。その顛末をドーラーピーラー訪問顛末とともに報告致します。

2000年にNHKが4大文明の一つとしてインダス文明の遺跡ドーラーピーラー遺跡の発掘状況をTV放送しました。また、本もNHK出版から出版されました。それを見て何とか観光で行けないものかと探したところ、ドーラーピーラー遺跡だけでなく他所も観光出来る12日間の旅行が見つかり、早速申し込み催行が決まり準備していましたが、2001年の西インド地震で催行不能になってしまいました。翌年は計画が無く、2003年には催行されましたが、この度は、ドーラーピーラー遺跡訪問を3日後にして、アーマーダバードでヒンズー教とイスラム教の暴動に巻き込まれてしまいました。乗っていたバスのガラスを4枚割られ、それ以上観光が続けられずに止むを得ずニューデリーに引き返すことになりました。1日無為に過ごす予定になっていたのに、半日の自由行動を利用

して、現地旅行社の車で Sulabh International Museum of Toilets を訪問しました。この博物館の存在を知ったのは1995年に香港で行われた国際トイレシンポジウム会場でのパンフレットでした。

トイレ博物館訪問は、1989年の第1回ヨーロッパトイレ事情調査団に参加して、ドイツ・ミュンヘンのオマルの博物館の見学。1992年の第2回ヨーロッパトイレ文化調査団にも参加して、オーストリア・ザルツブルグ郊外にあるラウヘン便器工場の地下にあるミニトイレ博物館の見学以来でした。

今回の旅の目的は、念願のドーラーピーラー遺跡の上下水システムの遺跡を実際に見ることと、果たしてNHKがCGで想像した通りなのか確認することでした。現地発掘責任者兼ガイドの説明を聞き、そして質問したものの、こういう返事でした。その返事は、「発掘は終了したが、これから検討して5年後を目途に報告書を作る作業をこれから始める」ということでした。ですから、何の結論も出ていないというのが現実でした。しかもNHKが放送したビデオも見えていないとのことでしたので、私が録画してあるテープをダビングしてインドに送る約束になり、近い内に送る予定です。

ところでスラブのトイレ博物館は1990年頃に設立した団体のようです。トイレ博物館がメインの施設ですが、最下層に属するカーストの人達が300名程、読み書きと同時に社会に出て働けるよう、手に職を付



写真上：ドーラーピーラー遺跡の前の筆者、写真左：インドニューデリースラブトイレ博物館の内部、写真右：し尿を運搬する最下層の人の人形、頭の上のバケツに×印あり(同博物館庭にある)、次ページの写真：NGOスラブ・トイレ博物館と併設されている職業訓練校の教室風景

けることを目的とした職業訓練校を併設しています。

その原点はインド独立の父と言われるガンジーさんの思想にあり、死後 40 年経ってその思想が生かされたということのようです。それはし尿の運搬を写真のように不可触賤民と言われた人達が実際にやっていたことを止めさせるのが大きな目的の一つでもあったようです。そのためにトイレ博物館を作り、トイレの改善をしてメタンガスを取り出し利用するシステムの普及、そして学校に於ける情操教育で社会に貢献している NGO のスラブです。



第30回定例研究会の講演を聴いて

菅家 啓一（本会会員）

3月2日午後6時30分より、東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センター会議室において、「発展途上国における尿尿由来の寄生虫事情」と題する講演がありました。講師は、前杏林大学客員教授の小野川尊先生で、医動物学がご専門（獣医学博士）の方です。

今回のテーマである「尿尿と寄生虫の関係」については、私は下水道に携わってから30数年経ちますが、ほとんど学んだことのない未知の分野であり、たいへん興味をもって聴かせていただきました。

日本では、寄生虫は尿尿・食生活と深く関わっており、昭和20年代まではかなりの感染率であったそうです。その後、寄生虫に対する予防対策（駆虫薬が普及したこと。化学肥料の普及により尿尿が畑などに撒布されなくなったこと。）が功を奏し、寄生虫保有者はほとんどみられなくなりました。しかし、発展途上国ではトイレや下水道などの環境衛生施設の整備が遅れており、また、中国などでは尿尿が畑などに撒布されていることから、土壌や農作物を介して多くの人間が寄生虫に感染しています。

講演では、各国で指導された実状をスライドを使って詳しく説明してくださいました。その中でも、体内に入った寄生虫が、駆虫薬によって子供のお尻から出てきた時の、

その数の多さには驚きました。ひどい場合は、体中にコブができ、脳も侵されることがあるとのことでした。

次に、中国での技術指導について紹介されましたが、検査設備の設置、その運用・管理など具体的な説明でとても分かり易く、また、技術移転に関しては様々な問題があり、定着するまでには乗り越えなければならない多くの苦労があることを知りました。施設の整備などのハード面は資金があればそれなりに進むこと、また、ソフト面では維持管理が容易ではなく、その中で女性が果たす役割の大きさ、大切さには驚かされました。

今回の講演は、「産児制限などの母性保護の課題を、寄生虫の駆除という目に見えるものを通して実現させていこうという壮大なプロジェクト」についての説明でもありました。たいへん勉強になりました。また、機会がありましたならば、ぜひお話を伺いたいと思っています。ありがとうございました。



小野川 尊先生

第27回し尿研究会例会の講演を聴いて

大庭 克世（本会会員）

3月5日（金）の例会の講話者は中村隆一さんと地田修一さんで、演題は「大正末・昭和初年の尿尿事情 - 藤原九十郎と高野六郎の言論活動と実践 - 」でした。

日本下水道協会がかって「日本下水道史」編纂のために収集した資料の中から、藤原・高野両氏の「都市問題」誌等への掲載論文に中村さんと地田さんが注目し、昨年「生活と環境」誌に紹介しましたが、今回は、この内容を両氏の活動の意義、当時の尿尿事情を交えて報告されたものです。

藤原九十郎氏は、京大医学部衛生学教室卒業後、大阪市の保健衛生行政で活躍された方です。昭和3年の「都

市の尿尿処分問題」（都市問題）で、腸系伝染病（腸チフスなど）の死亡が、外国に比べて多く、しかも都市部では大正7年～昭和2年の10年間で、人口10万人につき大阪で2.6人、東京で3.1人の腸チフス死亡者を出しているが、これは尿尿処理の不完全さから発生しているのだとし、「汚物掃除法」を改正し、尿尿処分を自治体の義務とすべきだと主張しています。「汚物掃除法」制定時（明治33年）は尿尿が一部大都市を除き有価物であったため、当分の間ということで当時も掃除義務者に処分が任されていたのです。そのほか、都市における汲み取り尿尿量、その処理方法などについて論じて

います。

高野六郎氏は、東大で細菌学を専攻、厚生省予防局長になり、汲み取り式改良便所の開発と普及に努められています。この便所は、昭和2年に発表され、3万個が設置されました。栃木県的那須のある村では寄生虫保有者が3分に1に減っています。著書に「便所の進化」があります。藤原氏と同じく保健衛生の立場から、汲み取り便所と農地への尿尿の施肥をともに改善するよう主張されています。また、質疑応答の中で、「水洗便所の日本での最初の設

置はいつか」とか、「日本銀行の尿尿処分は、当時隣接していた水路で船を利用して行っていた」などの興味ある話が出ました。

なお、藤原九十郎氏について中村さんはインターネットで著作、論文、経歴を調べられたそうです。それで、雑誌「大大阪」(大阪都市協会)で公害、清掃問題に健筆を揮っていたことまではわかったが、その論文の詳細や生・没年も不明なのだそうです。関西支部の会員の方でわかりましたならばお知らせ願います。

「本願寺水道を歩こう会」のご案内

3面で紹介いたしました「東本願寺と環境を考える市民プロジェクト」のプロジェクト第2弾として「本願寺水道を歩こう会」が下記により開催されます。

日時：4月24日13時30分集合 16時頃解散予定
集合場所：京都市営地下鉄東西線蹴上駅1番出口
蹴上から東本願寺までの約4.5kmのコースです。申し込みは本会関西支部木村淳弘(k-atsumi@kcn.ne.jp or TEL: 0743-77-7724)までお願いします。

本願寺水道とは

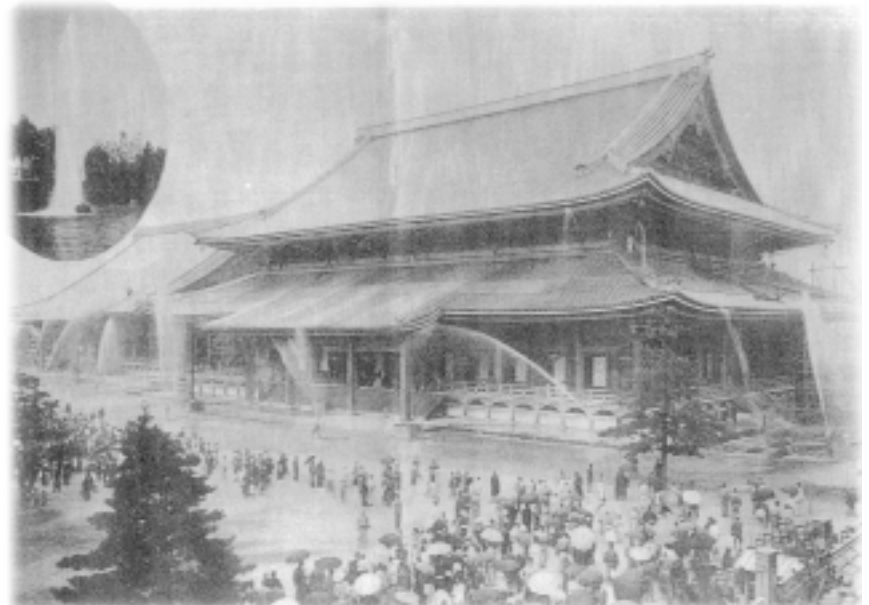
東本願寺は江戸時代何度も火災による消失と再建の歴史を繰り返してきました。明治28年、現在の御影堂、阿弥陀堂の再建がなされましたが、再び火災に遭わないよう防火の方法を考えあぐねていた東本願寺は、琵琶湖疎水を設計した田辺朔郎博士に相談を持ちかけました。それは、琵琶湖第一疎水工事が完成した明治23年のことでした。博士は、三条蹴上の琵琶湖疎水路より分水して東本願寺境内に至る内径12インチの水道鉄管を敷設する設計を行いました。明治27年「本願寺防火仕様書」を本願寺に提出し、翌年には鉄管敷設工事に着手、明治30年に8月に消火栓設備を含めて完成しました。この水道で引かれた琵琶湖の水は防火用水ばかりでなく、噴水、池の水、お堀の水等に利用されました。

地盤の高低差を利用した水道で、ポンプなしで東本願寺のお堂の屋根まで防火用

水を放水することができる画期的な施設でした。

現在では老朽化が進み、漏水がひどく高い圧力が掛けられなくなっていますが、今でも東本願寺の枳穀邸の池の水、お堀の水、防火用水の水源、噴水等に琵琶湖の水が供給されています。そのため、池やお堀から琵琶湖の水の汚染や生物相の変化をうかがうことができます。

今回は、その先人の偉業を学ぶため、本願寺水道のルートを歩いてみようという企画です。春の一日防災と環境を考えながら京の街を歩いてみませんか。ふるって、ご参加ください。



明治時代の放水の様子

やえざくらまつり - 兵庫県下水道フェスティバルのご案内

やえざくらまつり(兵庫県下水道フェスティバル)が4月25日(日)に開かれます。(小雨決行、雨天中止)日本下水道文化研究会関西支部も参加し、「パネル展示」、「リサイクル商品の配布」、「研究会出版図書の販売」を行い、下水文化についてPRします。多数来てください。

記

日時：4月25日(日) 午前10時～午後3時

場所：小野市黍田町 加古川上流浄化センター 桜づつみ・やなせ苑

JR加古川線市場駅から南東へすぐ近くです。

主催：加古川上流区流域下水道事業促進協議会

事務局：小野市水道部下水道課





第五回 博物館への誘い

岐阜・各務原「航空宇宙博物館」

稲村 光郎（本会運営委員）

昨年12月17日は、ライト兄弟の初飛行百年ということでも世界的に様々なイベントが開催された。しかし、歴史的にはライト兄弟に対する評価は必ずしも高いものだったとは言えない。当時の世界の飛行機発明家たちからみれば、無学の自転車屋が専門家の知恵を借りて、たまたま上手くいった程度にしか認識されなかったとされている。スミソニアン協会も、その発明を認めず、そのため初号機であるフライヤー号は永くロンドンの科学博物館に展示され、スミソニアン博物館には第二次大戦後に収められたという。

また兄弟の Patent に対する執着が、その後の飛行機の発達を遅らせたという人もいる。しかし、欧米の発明家たちが自己の Patent をいかに死守するかは、それらの伝記を読めば明らかであり、特に兄弟だけが批判されるいわれはないように思われる。

彼らの発明の最大のポイントは、翼を摺ってバランスを取る点にあり、（現在では翼の一部を出し入れするエルロンと呼ばれる形式になっている）機体にはそのためのワイヤが露出している。94年に千葉・幕張で開催された「スミソニアン展」で、ライト兄弟機を始めて見たとき、そのワイヤの細さにびっくりしたことを覚えている。

さて、当博物館の展示の目玉の一つである STOL（短距離離着陸）実験機「飛鳥」（昭和60～平成元）に飛行）は内装が外されており、その壁面にも操縦用ワイヤが走っているのが見える。ボランティアの方のお話では「パイロットは、これがあると安心だ」と言っています」ということであつたから、さすがに主装置ではなく、万一の時に最後の手段として人力で引っ張る装置を残しているようである。

ちなみに、当博物館は、ボランティアの活躍で評判が高

く、近くの川崎重工業の工場や自衛隊基地の出身者などが参加され、展示の説明や案内だけでなく、展示品のメンテナンスや修復などもおやりになっているそうであり、機体の維持状態がよいのもそのためだと言われている。

他の機体としては、旧陸軍の複葉偵察機、P-2J 対潜哨戒機、なつかしの F104J、T-33A、YS-11、川崎ベル式ヘリコプターなどが屋内外に並んでいる他に、シミュレータなども何点か用意されている。また飛行機の発展の歴史をたどるパネルなどもあり、子どもも退屈せず半日を過ごせる施設内容である。名古屋周辺には優れた博物館が多いが、ここも名古屋から1時間強の名鉄・各務原飛行場駅が最寄り駅である。また定休日が火曜日で、月曜日ではないから休日を中心とした博物館巡りにも都合がよい。

ところでライト兄弟は、数多い風洞実験によって翼型を定めるなど、緻密で慎重な計画によって初号機を完成させたのであるが、その風洞のレプリカが所沢航空発祥記念館（埼玉県）にあることも紹介しておきたい。

詳細は、

<http://www.city.kakamigahara.gifu.jp/museum/>



展示場内の風景

雨水東京国際会議へ向けて動き出す 雨水市民の会

東本願寺の市民プロジェクトはじめ、以前よりさまざまな場で協働している「雨水市民の会」（辰濃和夫会長）では、2005年8月に雨水東京国際会議を開催するべく、準備を始めておられますが、本会にも協力の要請がありました。具体的には、来年の国際会議を成功に導くため、日本での足元を固める必要から、「産官学民の雨水利用のネットワーク組織」を日本で立ち上げるにあたって、ネットワークに加わって欲しいということです。そして、このネットワークを立ち上げる目的で、今年8月に来年の会議を展望した「プレ会議」が予定されています。

雨と下水文化は切っても切れない関係にあります。雨に関しては合流式下水道の問題や費用負担の問題など、今後下水道関係者がビジョンを明確にするこ

とが求められている課題も少なくないと思います。多くの方が参加する機会が作られることと思いますので、ぜひ参加していただきたいと思います。

なお、2005年の国際会議開催は、昨年の世界水フォーラム雨水利用 in 京都での「京都宣言」の実現に向けた活動を議論する場となるようです。京都宣言で採択された行動計画を以下に示しておきます。

1. 私たちは雨水利用を社会の中にもっと根づかせるために、国や地域の水資源および水環境政策に雨水利用を位置づけ、その推進のために制度化を推進する。
2. 私たちは雨の意識と文化の革新をはかり、雨をもっと大切に、もっと有効に利用していくために雨の総合科学である雨水学を構築する。

3. 私たちは産官学民がそれぞれの役割を發揮しながら、一体的かつ総合的に雨水利用を推進していくために雨水利用のネットワークを強化し、その活動の機構整備を目指す。
4. 私たちは世界の水危機を打開していくために雨水利用の国際交流と国際協力をいっそう推進する。
5. 私たちは世界の雨水利用関係団体と共同し、地球規模の雨水利用のネットワークの拠点であり、雨水の情報発信・受信の拠点である国際雨水センターの実現を目指す。
- 2003年3月22日

お知らせ エコ・グリーンテック 2004 (エコ・グリーンテック実行委員会、環境緑化新聞等主催) が5月26日(水)から3日間、東京ビックサイトで開催されますが、同イベントのなかの特別講演会で、昨年の下水文化研究発表会で優秀論文賞を受賞された倉宗司さん(みずとみどり研究会)が、「保全型下水道と緑化～小金井の雨水保全から～」と題して講演されます。26日15時から16時30分、セミナールームCにて。

このほかにも、考古学の視点からの人と環境の関係など興味ある講演も少なくないようです。詳しくは、http://www.interaction.co.jp/event/egt/egt_02.html

第18回多摩源流まつりのイベント紹介

水	源流ゾーン	多摩水系清酒展、利き酒大会など
味	小菅の味体験ゾーン	大鍋(イノシシ汁)、ヤマメ塩焼き、源流そば、イノシシの丸焼き
体	自然観察ゾーン	源流宝さがし、マスのつかみ取り
創	創造ゾーン	原始火おこし教室、木工竹細工教室
芸	パフォーマンスゾーン	郷土芸能(大菩薩御光太鼓)、歌謡ショー、日本一のお松焼き

運営委員会・事務局より

平成15年度の決算が終わり、印刷費、送料などの経費削減の努力が功を奏しているように思います。出口を締めるばかりでなく、入り口も何とか拡大できないものかと、運営委員会ではいろいろと工夫はしてまいりましたが、今一度会員各位からのアイデアの提供、ご協力を強く訴えたいと思います。

これまでふくりゅうは申し出ていただいた方に限り、メールで発行通知をお送りし、ホームページで見えていただいておりますが、さらなる経費削減のため、プリントアウトの送付を希望する方にのみにお送りし、原則としてはホームページをご覧くださいように変更したいと思っております。経費削減のかなりの部分が、運営委員のボランティア作業に依存している現状がございますので、ご理解いただきたいと思っております。

本会は会費をベースにして運営され、会費に見合った会員サービスを提供していきたいと思っておりますので、会費の納入はすみやかにお願いいたします。また、任意ですが会費とともに1口千円のカンパも募りますので、併せてお願い致します。

運営スタッフの募集をしております。とくに経理に明るい方をご紹介いただければ幸いです。ホームページ更新のお手伝いをいただける方も引き続き募っております。自治体、市民向けのページも作れたらと思っておりますので、よろしくお願ひします。

編集後記 決算の結果明らかになった数字に約25万円の会費滞納があります。つい、忘れてしまうというのは、誰にでもあることと思っておりますが、なかには数年間未納のまま(この間刊行物など受け取りながら)退会される方もおります。けち臭いようですが、発送作業を自前でやって経費を浮かしても水の泡になってしまうような気がします。▶会員の関心が多様化していることが、いよいよはっきりとしてきたような気がします。300人近い会員がいらっしゃれば当然のこと。分科会、支部活動にシフトしていくなかで、分科会、支部が自主的に運営していくことが、組織としての柔軟性と持続性にとって必要なことだと考えます。(酒井彰)



し尿の資源活用で話題になるガスの燃料利用(写真上)、ガスを発生させるタンクの上には管理用のマンホールもない。(写真左)[ダッカ市内のスラム地区で]

ふくりゅう 通巻37号目次

第8回総会案内 多摩源流まつりへのお誘い	1
「アフリカのトイレを考える会」に参加して	2
動き始めた「東本願寺と環境を考える市民プロジェクト」	3
ニューデリー・スラブ・トイレ博物館再訪	4
第30回定例研究会、第27回し尿研究会例会を聴いて	5
「本願寺水道を歩こう会」ご案内	6
第5回博物館への誘い など	7

特定非営利活動法人
日本下水文化研究会
〒162-0067 新宿区富久町6-5
NJS富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129
jade@jca.apc.org
aan63630@syd.odn.ne.jp

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご欄ください。
<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>